

---

---

## 編集後記

最近、人工知能の発達が目覚ましい。医療の分野においても、がん細胞のゲノムに存在する遺伝子変異を網羅的に調べ、その腫瘍特有の遺伝子変異に適した効果的な治療方法を患者に提供する新しい医療が行われようとしている。インターネット上でがん細胞のゲノムに存在する遺伝子変異の研究論文や臨床試験情報など膨大な情報を迅速に分析するために、IBMのワトソンが活用され始めている。もちろん、患者にとっては朗報となるが、一方で、最近、若者が幼少期からゲーム器、スマートフォン、パソコンなどに没頭しているのを見てみると、こうした機器の発達に不安を感じるの私だけではないであろう。

実は、紀元前300年頃の「莊子」にも「機械を有する者は、必ず機事有り。機事有る者は、必ず機心有り」という説話がある<sup>1)</sup>。老人が井戸の中に入り甕で水を汲んでいる。水を取り畑に撒くなら、はねつるべという機械があるのに。そう思って、孔子の愛弟子の子貢が声をかけたところ、「知ってはいても使わない」のだという。その理由を尋ねられ老人は答えた。「使い出すと必ず機械に頼る仕事(機事)が増える。増えると頼る心(機心)が生じ捕らわれる。振り回されるのはいやだ。邪魔してくれるな」と子貢は追い払われた。

パソコンが広く普及したのは、1995年頃発売されたウィンドウズ95以来であろうが、今では事務処理においてもパソコンは幅を利かせ、大学では教職員の殆どの仕事が、

一日中、キーボードを叩くことになってきた。たった20年間の変化である。機械を使うことで、人間は自分のエネルギーと時間を節約できる。しかし、そうして確保されたエネルギーや時間は、豊かに生きるために有効な使い方をしているとは言えず、また、人間本来の生き方を手放しているようにも思える。機械を使ううちに、人間は機械に依存し、機械が好む考え方をするようになる<sup>2)</sup>。それは精神的なストレスを生じさせているばかりでなく、人類が誕生して以来、数百万年をかけて自然と共生しながら自ずと獲得してきた人間固有の「じっくり考える」能力、「互いにface-to-faceで会話する」能力、「五感すべてを研ぎ澄ませる」感性を衰弱させている。一度失われれば復活は難しいであろう。しかし、日頃から研究者や個々人が注意するしかないのが現状である。

### 文 献

- 1) 日本経済新聞 春秋2016年10月2日
- 2) 林 久史 日本女子大学紀要 第23号 pp.7-12, 2015

金井 浩

東北大学大学院工学研究科電子工学専攻  
／医工学研究科医工学専攻

---

---

超音波医学

Japanese Journal of

Medical Ultrasonics

第44巻 第2号 (通巻第298号)

© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine

—禁転載—

本体価格 2,000円+税 (本誌購読料は会費に含まれます。)

平成29年3月15日発行

編集者 公益社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩

発行者 公益社団法人日本超音波医学会 理事長 工藤 正俊

〒 101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23-1

お茶の水センタービル6階

TEL 03-6380-3711

FAX 03-5297-3744

印刷所 大村印刷株式会社